

特別支援教育実践マニュアル

< 8 >

～ 場面別・発達障がい別の 教育的支援 ～

特別支援教育実践マニュアル<No.8>をお届けします。

発達に遅れや偏りがある子の場合、その発達の特性によって教育的支援のポイントは大きく異なってきます。

今号では、支援のポイントを絞り込むときに役立つ視点を3つ挙げ、発達障がいに関する実践的な知識を整理します。

そして、発達の特性によって異なる支援のポイントを、2つの場面で具体的に示します。

ここでいう「発達障がい」とは、医学的診断の有無に限らず、障がい特性を健常な状態からのスペクトラム(連続体)として捉えた「特別な教育的支援を要する状態」を指します。

・ 発達障がいを理解するための3つの「視点」

1. 待つことが苦手 (ADHD傾向のある子)
2. 不安感が強い (自閉傾向のある子)
3. 自信がない (LD傾向のある子)

・ 発達障がい別に支援が異なる2つの「場面」

1. 活動が切り替わる場面
2. 叱って注意する場面

発達障がいを理解するための3つの「視点」



1. 待つことが苦手 (ADHD傾向のある子)

実践マニュアル No.3 参照

「あの子はADHD傾向がある」「多動で衝動的だ」「不注意なことが多い」と言われたら「待つのが苦手な子かな」と考えてみましょう。

待つことが苦手な子は、自分の“欲求”を保留することが苦手です。自分の言動をほどよく調節できず、しゃべり過ぎたり、やり過ぎてしまうことがあります。

待つことが苦手な子は、“判断”を保留することも苦手です。すぐに「解らない!」と言ってあきらめ、「解った!」と思い込んでミスが多くなります。

待つことが苦手な子は、“態度”を保留することも苦手で、友だちと競って負けそうになると急に不機嫌になります。

待つことが苦手な子は、“注意”を保留することも苦手です。授業中、いったん窓の外を見たり、ノートに落書きを始めたりすると、注意を授業内容に戻しにくくなります。

2. 不安感が強い (自閉傾向のある子)

実践マニュアル No.7 参照

「あの子は自閉傾向がある」「こだわりが強く時々パニックを起こす」と言われたら「容易に不安になる子かな」と考えてみましょう。

作文や絵画の創作、清掃活動では、どこから始めればよいのか、どこまで行えばよいのかが分からず、不安になります。自由度の高い、曖昧なことへの対処が苦手なのです。

人の感情を読み取ることが苦手で、不安になります。相手の表情や声の調子を、周囲の状況と関連づけて感じ取ることが苦手なのです。

体を少し押されただけで、強い勢いを感じて不安になります。相手の働きかけに過敏で、侵入される感覚になるのです。また、いつもの手順でしていることを制止されると、自分を全否定されてしまうような感覚に襲われます。

3. 自信がない (LD傾向のある子)

実践マニュアル No.5 および No.6 参照

「あの子はLD傾向がある」「書字表出障害かも知れない」「算数障害かも知れない」と言われたら「いろいろなことに自信がない子かな」と考えてみましょう。

学習場面で“達成感”を味わう機会や、“承認欲求”を満たされる機会が少なくなりがちです。個別の学習場面であれば「あ、そうか!」と分かる喜びを味わう経験も得やすいのですが、集団の学習場面ではなかなか得られないでしょう。自分を肯定的に受け止めるのが難しくなり、やる気をなくしてしまいがちです。

友だちとの関係では、競い合う場面で「やった!」と喜ぶ経験や、協力し合う場面で「やったね!」と喜び合える経験も少なくなりがちです。社会的に望ましいやりとりの仕方を身につける機会が少なくなります。

活動が切り替わる場面

活動場面が切り替わる時、人の気持ちは不安定になります。授業が始まる時、あるいは別の課題に移るとき、発達に遅れや偏りのある子は、どのような不適応を起こしがちなのでしょうか。そして、そのときの関わるポイントは？

待つことが苦手な子

<遊んでいて次の活動の準備が遅れてしまう場合>

肩や背中に手を置いて声をかけましょう。親しみのある感触が嬉しく、気持ちを切り替えやすくなります。

学習の準備を手伝うのも良いでしょう。その際、仕上げ（例えば“筆箱を出す”など）は本人にさせます。“自分でする”という感覚を少しずつ持たせるようにしましょう。

<注目されたくて悪ふざけが過ぎてしまう場合>

静かになるまで待つというやり方は避けます。気持ちが高ぶると、自発的に言動を調整することが難しくなります。自分をモニターすることが不十分になるのです。

叱ってもうまくいきません。間違った方法で注目を集めることを覚えるだけです。頑張っている子に注目し、その子をモデルにできるよう声をかけます。

「あっ、さん、姿勢が良くて素敵です。おっ、さんも、素敵ですね」など。

不安感が強い子

<見通しが立たなくて動けなくなる場合>

机間支援など個別で説明をする際には、フローチャート式に図案化したり、箇条書きにしたりして、目で見て分かりやすくなるよう工夫しましょう。見通しが立ちやすくなります。絵や文字などが介在することで、相手（説明者）から受ける侵入的な感覚も緩和されます。

なお、体に触れて活動を促すのは良くありません。強い口調や大きい声で促すのも良くありません。侵入される感覚を強めてしまいます。



<グループ学習で戸惑う場合>

活動の最初から、明確な役割を与えます。例えば、書くことが好きな子は書記、数に興味がある子は何かを数える係など、活動に参加しやすくなるように工夫します。

自信がない子

<やり方が分からない場合>

その子の教材を使ったり、その子自身をモデルにしたりして全体に説明する機会を増やしましょう。間近で説明を聞くことで分かりやすくなり、活動への意欲が増します。

机間支援を多めに取り入れ、その子が見ている本などをスッと指し、注目すべき箇所を分かりやすくします。ちょっとしたヒントで出来る課題が増えることがあります。

<ひとりで困っている場合>

“間違っても大丈夫”“ヒントをもらってできれば、それも良い”という雰囲気包まれているようなクラス作りが重要です。

叱って注意する場面

発達に遅れや偏りのある子を叱ったり注意したりする場合、どのようにすれば良いのでしょうか。好ましくない言動をそのままにするのは、他の子たちにとっても良くありません。叱って注意する際の、発達障がい別のポイントは？

待つことが苦手な子

<友だちの嫌がることをやり続ける場合>

良くないことだと分かっているのに、してしまいます。道理を説いてももうまくいきません。また、集団内の力関係に敏感です。みんなの前で叱るのは避けましょう。その子の立場がなくなり、不安定になります。廊下に出るなど場所を移し、短く分かりやすく叱って席に戻しましょう。

<注意されて気分が落ち込む場合>

いったん気持ちが沈んでも、ちょっとしたきっかけで回復しやすい子です。その子が楽しみにしていること（例えばクラスレク）を話題にし、それを心の糧にして頑張るよう声をかけましょう。



不安感が強い子

<混乱して感情的になっている場合>

「あー、みんながオレをいじめる！」などと言って物を壊したりする場合「～しません」「ダメです」といった否定的な言葉は使わないようにします。落ち着いた低い声で「座ります」「一緒に保健室に行きます」などと、肯定的な言葉で導きます。日頃から本人と「気持ちがむしゃくしゃしたら保健室へ行こう」などと、落ち着くために行く場所を取り決めておきましょう。

重要なのは、本人の気持ちが静まった頃に再びちょっかいを出してくるような子どもたちへの関わりです。休み時間などを利用して、その子たちの話をよく聞きましょう。

自信がない子

<優越感に浸ろうとする場合>

劣等感を補おうとして、自分よりも弱い子に意地悪をしてしまうことがあります。端的に注意したあと、今やるべきことを少しでもさせて「そう、それでいいです」と認めましょう。

どんなタイプの子に対しても、効果的に叱って注意するためには、日頃から肯定的なメッセージを与えておくことが大切です。日常の何気ない子どもの行動に感心し、小さなことを褒めるのです。例えば、整列しているときに少し後ろに下がって友だちを列に入れた、自然に「ありがとう」と言えた、他の子の落とした物をスッと拾って手渡した、走らず落ち着いて歩くことができたなど、たくさんあります。

まなびサポート事業

教育研究センター 美浜北小学校内 381-7960・7961

まなびサポート相談室 見明川中学校内 390-5204